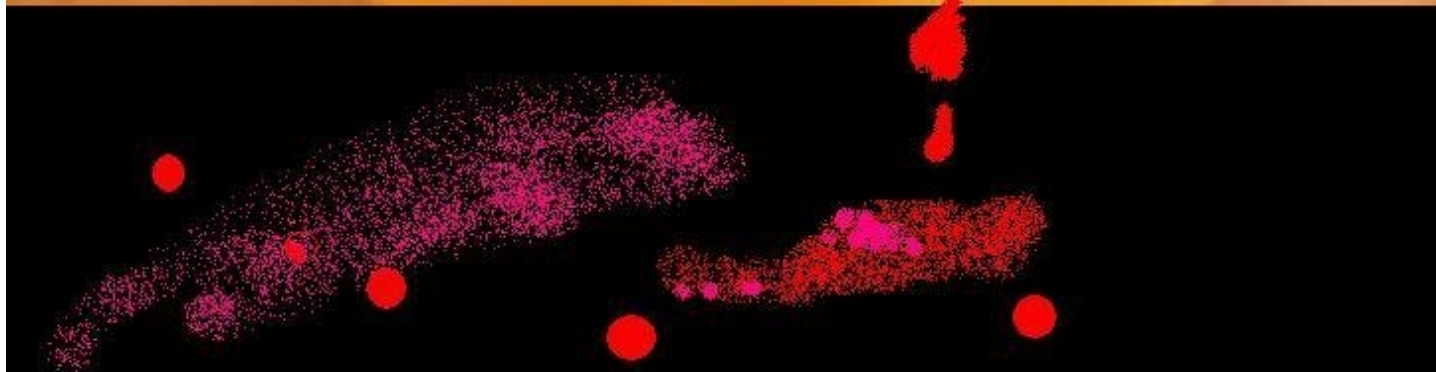


きもだめし



絵夢ロイ

肝試し大会

夏休みのある日のことです。

今日の夜はハルカちゃんの住んでいる町で肝試し大会があります。

ハルカちゃんはお化けなんて全く信じていません。

この前、お父さんに連れて行ってもらった遊園地のお化け屋敷も全く怖くありませんでした。

ああいうのは、大人がお化けの衣装を着てやっていることを知っているのです。

夕方になりました。

ハルカちゃんは友達のコリちゃんを誘って肝試し会場に行きました。

みんなは手に懐中電灯をもっています。

完全に日が暮れるまでキャーキャー言いながら、

お化けなんて本当はいないんだよね、と話していました。

そうしているうちに日が暮れあたりは真っ暗となりました。

町の大人は子供達を集めて、これから肝試し大会を始めると言いました。

大人は子供達をまるく座らせて、怖〜い話を聞かせました。

それは、これから肝試しを行うお墓のことで、

昔首吊り自殺をした女の人時々お化けとなって現れるというものでした。

ハルカちゃんたちはしばらく静かにその話を聞いていましたが、

誰かが、

「よーし、僕はそのお化けに会ったら本当に足が有るか無いか、

お化けに見せてもらうよ。」

なんていうものだから、集まったみんなはドット笑ってしまいました。

こんな調子では、子供達はお化けなんて全く信じていません。

町の大人たちは肝試しのために壊れたちょうちんや、

木につるす人形や赤い光のライトなどを用意しましたが、

とてもそんなもので子供達が怖がるとは思えませんでした。

そうしているうちに夜もどんどん深まり、時々遠くで稲妻がピカッとひかり怪しい雰囲気が出てきました。

風も生暖かく妙に湿っぽくなってきました。

さあ、肝試しの開始です。ハルカちゃんとコリちゃんは4番目の組でした。

出発を待っていると、前の組の子供達がキャーと悲鳴を上げているのが聞こえてきます。

前の組の子供が戻ってきました。

「あーあ、ちっとも怖くないんだから。」

こんなことを言っています。

ハルカちゃんたちも大人がお化けのまねをしていることを知っているので、

出発の順番になっても全く平気でした。

出発係の大人がハルカちゃんとユリちゃんに出発するように合図をしました。
二人は並んでお墓の方へ歩いて行きました。

お墓に入ろうとすると、普段見かけないお婆さんが、
ちょっとちょっと、
と言って二人を手招きしています。
ハルカちゃんたちがなんだろうと思っておばあさんのところへ行くと、
おばあさんは低い声で言いました。
「あなたたちは4番の組だ。死番だ。行くのをやめなさい。」
ハルカちゃんたちは、ハハハ、何を馬鹿なことを言っているのだろうと、
お婆さんの言うことを無視してそのまま墓地に入りました。

しばらく暗い中を歩いていくと、
突然、ギャーと言っておおかみ男が墓石の後ろから飛び出しました。

「キャー」
とハルカちゃんたちは後ろへ逃げました。
しかしすぐにそれは大人がお面をかぶっているんだと分りました。
ハルカちゃんたちは、
「怖くないよーだ。」
と言って先へ進みました。
次に出てきたのは壊れたちょうちん、
その次は、人間がブラーンと突然目の前に現れました。首吊り死体です。
キャーと悲鳴をあげましたが、すぐにそれは大きな人形を木につるしたものであることがわかりました。
なーんだと思いさらに先に進みました。

次は、ある墓石が血の色のようにポーとうす赤くひかり、墓石のところに古い小熊のぬいぐるみが、口から赤い血をしたたらせ、口をパクパク動かしています。
きっとこれも何かの仕掛けに違い有りません。
次にフランケンシュタインのお面をかぶった大人がガオーと現れましたが、
ハルカちゃんたちは慣れてしまってさっぱり怖くありません。
そうしてさらにいくつかのビックリをかいくぐって墓地の出口の所に来ました。

先に終わった組の子供達何が一番怖かったかとお互いに話していました。
ハルカちゃんたちもその話しに加わりました。
「ぜんぜん怖くなかったね。みんな作り物なんだもの。」
誰かがそう言いました。
ハルカちゃんも言いました。
「本当本当。それに、あれなーに。
小熊のぬいぐるみなんて全然お化けらしくなかったね。」
でも、それを聞いたみんなが言いました。

「小熊のぬいぐるみ？そんなの無かったよ。」

ハルカちゃんとユリちゃんは首をふって、そんなことないと言い張りました。

「ほら、首吊りの人形が出てきたあと、お墓が血のようにうす赤くってポーッと誰かが懐中電灯で照らしているみたいで、そこで、口から血をたらした小熊のぬいぐるみが動いていたじゃない？」

他の子供達は顔を見合わせています。

「うそ、そんなの見なかった。」

と、みんなが言います。

それでハルカちゃんは係りの大人に聞きました。

「ねえ、今日のお化けの中に小熊のぬいぐるみを動かすもの、あったでしょ？」

係りの大人はハルカちゃんを見つめ、

「え？ いや、今日はそういうのは用意してないよ。」

ハルカちゃんもユリちゃんも実際に見ているので納得しません。

係りの大人も他の大人と話しをしました。

やはり今日用意したお化けの中にはそれは入っていません。

ハルカちゃんとユリちゃんがあんまり真剣に言うので、

みんなでもう一度見に行くことにしました。

みんなはもう一度墓地に入っていく、ハルカちゃんはそのお墓を指し示しました。

「あのお墓だよ。ポーッと光ってぬいぐるみが動いていたの。」

生暖かい風が流れます。

周りの木の葉が、ザーザーと気味の悪い音を立てています。

大人たちは懐中電灯でそのお墓を照らしました。

なんとそのお墓は、肝試しの前に話した、本当に自殺した女の人のお墓でした。

みんな急に鳥肌だってきました。

しかしぬいぐるみは無かったので、何かの見間違いだろうと言うことになりました。

肝試し大会が終わってみんな家に帰りました。

ハルカちゃんはお父さんとお母さんに、今日の怖かった話しをしました。

不思議なことがあるねえ、とお母さんが言いました。

夜も遅くなったので眠ることにしました。

おやすみ、と言ってハルカちゃんは自分の部屋に行き、パジャマに着替えて電気を消しました

ハルカちゃんはほっとしてベットに入りました。

布団の中でなにやら手に触れるものがあります。

なんだろうと思って布団をめくると黒いものがあります。電気をつけてみました。

「キャー——。」

ハルカちゃんは悲鳴をあげました。

そこには、さっき墓場で見た小熊のぬいぐるみがありました。

ぬいぐるみの口から出た血が布団を赤く染めています。

その小熊のぬいぐるみが口を開きました。

「ハルカちゃん、今日4番目だったでしょ？ 行くなといったのに。フフフ。」

次の日の朝、ハルカちゃんはむごたらしい姿で発見されました。

パジャマの中には、ハルカちゃんの皮だけが残っていたのです。

そしてパジャマの首のところにはハルカちゃんの髪の毛がごっそり残っていました。お父さんとお母さんは昨日肝試しと一緒にいったユリちゃんの家で電話をしました。

ユリちゃんも同じ姿で発見されました。

ユリちゃんのベットには、薄気味悪い古い小熊のぬいぐるみがあり、そのぬいぐるみのお腹は人を食べたようにふくれていたのです。

肝試し、4番目の組には本当のお化けが現れるのです。

それでもあなたは行きますか？

終わり